

書評「ウィリアム征服王の時代」を考える—— Benjamin Pohl, ed., *The Cambridge Companion to the Age of William the Conqueror* (Cambridge, 2022)

中 村 敦 子

キーワード：ウィリアム征服王、11世紀ヨーロッパ

はじめに

2022年、ケンブリッジ大学出版会より『ウィリアム征服王の時代必携』*The Cambridge Companion to the Age of William the Conqueror* (Cambridge, 2022) が出版された。この Cambridge Companions のシリーズはケンブリッジ大学出版会により1986年に開始し、現在までに600冊以上が刊行されている充実したシリーズである。作家や芸術家といった個人、あるいは音楽や思想など様々なテーマについての手引きを意図したものであり、とりあげる題材もトウキディデスから K-Pop までと幅広く、内容もそのテーマに関する基本的情報だけでなく近年の論争まで視野にいれている¹⁾。

このシリーズの中のとくに哲学・宗教・文化の手引きの一書として編まれた本書は、編者ベンジャミン・プール Benjamin Pohl によれば「ウィリアム征服王についての手引きではなく、ウィリアム征服王が生き、彼を作りあげた時代そのもの」を対象としている²⁾。

ウィリアム征服王と彼が成し遂げたノルマン征服に関する研究史の豊かさについては言を俟たない。近代歴史学の成立以前からノルマン征服については様々な見解が述べられてきたが、その中でも影響力の強さで研究史上注目すべき存在がエドワード・オーガスタス・フリーマン Edward Augustus Freeman であろう。19世紀末の歴史家フリーマンは、イングランド中世史の泰斗であり、代表作として6巻本の名著『イングランドのノルマン征服の歴史』*The History of the Norman Conquest of England* を残した³⁾。フリーマンはウィリアム征服王を、その後800年のイギリス史を作り上げたと評価し、ノルマン征服という歴史的事象をウィリアム征服王という人物から描写することに注力した。すなわち、偉大な人物による偉業が歴史を形作ってきた、という観念を前提としてノルマン征服を理解しようとしたのである。19世紀的な歴史観が体現されたものであると言える。だが、このような理解は過去のものとは限らない。プールはフリーマンをとり

あげつつ、現在のウィリアム征服王についての書物も同様の観点で書かれているものが多いことを指摘する⁴⁾。すなわち、一般的な歴史関連書の多くがウィリアム征服王をノルマン征服という偉業をなした偉大な人物である、と描いている。歴史上の人物を偉人として描くことは、その歴史的事象への興味関心や理解を深め、また、ある人間モデルを提示するという役割を担うのかもしれない。だがその観点で歴史を考えることは、歴史的な様々な条件を1人の人物の能力に還元してしまうことにつながる。プールは、そうではなく、本書は北西ヨーロッパの比較文化的なコンテクストの中でウィリアム征服王の時代をとらえ直すという目的のもとに編まれたと述べる⁵⁾。

これまで、ウィリアム征服王とノルマン征服を可能にしたノルマン人を特別な能力をもった人間集団とみなしたり、ノルマンディ社会の独自性に注目する、またはノルマン征服前のアングロ・サクソン期イングランドを大陸ヨーロッパと隔絶した島国社会と理解するなど、ノルマン征服を特別な民族による特別な事件としてとらえる視角は長い間ノルマン征服研究の無意識的な前提となっていた。だが近年のノルマン征服研究は、この歴史的事象を当時の北西ヨーロッパ世界全体の中で再検討するという視角に大きくシフトしており⁶⁾、本書はその方面での研究の蓄積の1つとなろう。ノルマン征服研究が「イングランド史上におけるノルマン征服の意味」から離陸し、多様な切り口を提供するテーマであることが認識され、まさに研究は百花繚乱の時代に入っている。

序文でプールは編集の工夫を述べる⁷⁾。執筆者たちはすでに実績のある研究者たちに加え、若い世代が集まっており、さらにイギリスの大学に所属する研究者たちが多いものの、アメリカ、北欧にまたがり、またイギリス内でもウェールズ、スコットランドを含み、多様な執筆陣となっている⁸⁾。編者プール自身も1985年生まれと若手の研究者であり、現在ブリストル大学の准教授 Associate Professor である。彼の研究はすでに高い評価を受け、研究も多く、この分野のリーダー的存在の1人である⁹⁾。すなわち、イギリス史研究者、イギリス人が中心となり研究してきたノルマン征服、ウィリアム征服王、ではなく、ウィリアム征服王の時代を広く11世紀北西ヨーロッパととらえ、その文化的コンテクストの中で位置付けるため執筆陣の文化的背景の多様性が意図されている¹⁰⁾。逆の見方をすれば、これが注目すべきテーマとして様々な文化的背景をもつ研究者をひきつけているということであろう。したがって、本書の目的は「ウィリアム征服王とノルマン征服」ではなく、その時代について多様な切り口を提供することなのである。

以下、本書の構成、各章の概要を整理し、本書の特徴について筆者の考えを述べることにしたい。

1. 構成と概要

本書は大きく4つの部に分かれ、それぞれ「第1部 故郷と異郷」Home and Away「第2部 空間と社会」Space and Society「第3部 個人と組織」Individuals and Institutions

「第4部 文化的視座」 Cultural Perspectives というタイトルがついている。各部には3章あるいは4章がバランスよく配置される。また本文の前後には、編者プールによる序章と、アングロ・ノルマン史研究の泰斗 D・ベイツによる終章が置かれ、重要な役割を果たしている。最後に参考文献リストと索引がつく。

次に簡単に本書の内容を簡単に紹介しておく。

序文はプールによる本書の枠組みの表明であり、これについては本稿の頭でみた¹⁾。続く第1部「故郷と異郷」においては、アルヘイデイス・プラスマン「1. ノルマンディと大陸」 Alheydis Plassmann, 'Normandy and the Continent'、アレクス・ウルフとニール・マクギガン「2. イングランドと島嶼世界」 Alex Woolf and Neil McGuigan, 'England and the Insular World'、マイケル・H・ゲルティング「3. スカンディナヴィアと北海世界」 Michael H. Gelting, 'Scandinavia and the North Sea World' が配置されている。

本書はその性質からして時系列的叙述は少ないが、第1部は部のタイトルから予想されるよりもずっと、時代に沿って事実関係についての叙述が見られる。ノルマンディの成立期から扱う第1章は当初から公の権威が確立していたとされてきたノルマンディの凝集性は実際は緩やかに成立し、ヨーロッパ世界の他の地域と教会改革や騎士文化を共有しつつ、独自の意識を持っていた点が挙げられる。続く第2章は征服前から後のブリテン島内部の状況を、イングランドだけでなくスコットランド、ウェールズに関してもとりあげ、第3章では、北歐世界の状況が述べられる。ブリテン島との関係を含めた北歐世界の歴史が整理され、ノルマン征服前後の状況、すなわち11世紀における北歐世界の重要性が改めて意識される。ノルマン征服やウィリアム征服王の時代に関して研究文献が圧倒的に豊富なイングランドとノルマンディ以外の地域もふくめた11世紀の時代的状況が簡潔に整理され、全体的な動きを把握することができる。

第2部「空間と社会」には、キャサリン・ワイカート「4. 風景と定住」 Katherine Weikert, 'Landscape and Settlement'、リチャード・アレン「5. 教会と社会」 Richard Allen, 'Church and Society'、エリアス・オクサネン「6. 商業と移動」 Eljas Oksanen, 'Trade and Travel' がある。

第2部以降は第1部に対し、時系列的な叙述は後ろに下がり、当時の状況についての分析が続く。第4章は景観が人々の生活に与えた影響だけでなく、人々が景観に与えた影響も意識すべきとしながら、農業、漁業といった生活に直接関わる産業から娯楽としての狩猟、場所の記憶まで含め、考古学的成果を取り込みつつ考察する。また同様に考古学の成果を利用しているのは第6章であり、人間とモノ、情報の移動や定住を扱う。考古学の技術を利用した道路網の再現により、地方の道路網のありかたまで明らかにする。まだ、陸上交通だけでなく海上交通も含めて理解する重要性が感じられる。第5章は一方、イングランドとノルマンディそれぞれの教会を概観し、政治的枠組みを越えたネットワークをもち、かつ政治と密接にからみあっていた当時の教会のあり方の特徴を

みる。征服王時代ランフランクやオドといった有力な高位聖職者たちの存在が征服王期の教会の安定性に貢献した点を指摘している。

次の第3部「個人と組織」では、ローラ・L・ギャサガン「7. 家族と親族」Laura L. Gathagan, 'Family and Kinship'、そしてダニエル・ブッカーとS・D・チャーチ「8. 貴顕と貴族」Daniel Booker and S. D. Church, 'Nobility and Aristocracy'、さらにビョルン・ヴェイラー「9. 王権と合意」Björn Weiler, 'Kingship and Consensus'、またエミリー・タブトー「10. 法と裁判」Emily Tabuteau, 'Law and Justice' と並んでいる。

第3部は個人あるいは集団としての人間たちを扱う。第7章は、フランス王家やイングランド王家、デンマークやノルウェーにまたがる君主家系の様々なつながりがたどられる。ノルマンディ公家出身でエセルレッド、そしてクヌートの妻となったエマたち女性の存在をはじめ、家族、親族関係が支配にいかにか大きく関わっていたかが明らかにされる。第8章は、当時の支配層について、領地経営や支配ではなく、彼らの振る舞いや行動様式といった文化面をとりあげる。征服前からのノルマンディとイングランドの宮廷文化の共通性が指摘されている。第9章では、実際の王がどうだったかよりも王の理念をギヨーム・ド・ポワティエなど叙述史料からたどる。君主は1人で権力を行使することはできず、親族、家臣、聖職者たちなど様々な人々による、恩顧、ライバル、友愛などをもとにした関係の中に君主が埋め込まれていた。イングランドにおいてもノルマンディにおいても、善い王のイメージは共通しているが、それは広く北西ヨーロッパに共通と言えるのである。対して第10章は、本書の中でも最も制度的な側面を扱っている。ドゥームズデー・ブックや証書史料を用いつつ、征服前イングランド、ノルマンディ、そして征服後のイングランドの法や裁判のシステムの簡潔な説明となっている。

最後となる第4部「文化的視座」Cultural Perspectives が含むのは、マシュー・ストリックランド「11. 戦争と暴力」Matthew Strickland, 'Warfare and Violence'、またベンジャミン・プールとエリザベス・ファン・ハウツ「12. 歴史と記憶」Benjamin Pohl and Elisabeth van Houts, 'History and Memory'、キース・バスビー「13. 言語と識字」Keith Busby, 'Language and Literacy'、最後はミア・ミュンスター＝スヴェンセン「14. 学校と教育」Mia Münster-Swendsen, 'Schools and Education' である。

第11章では当時のヨーロッパ社会に埋め込まれた戦争と暴力のあり方について、ノルマンディの独自性ではなく、西ヨーロッパとの共通性が指摘される。第11章以外の第4部は、文字文化に深く関わる内容となっている。第12章は、11世紀ノルマンディから12世紀にかけての叙述史料とその特性が整理され、史料紹介としても有効である。とくに、女性の役割と、史料の「生涯」——作成時だけでなくその後——の重要性が強調される。第13章は言語と識字をとりあげる中で、他の章が地理的枠組みとしてきたイングランド、ノルマンディ、あるいはデンマークといった地域内の差異に注目する。征服前のイングランドの言語状況は均一とは言えなかったし、アングロ・ノルマン語は

ノルマンディのフランス語が単に英語の影響を受けたものではない。また識字が、読むことができるのか、どの程度読めるのか、何が書けるのか、など多様な内容を持っているうえに、俗語の複雑な言語状況にさらにラテン語が加わった世界の中で当時の人々は生きていた。最後となる第14章では、ノルマン征服による文化的断絶を否定し、ランフランクやダンスタンら、また修道院としてウォルサム修道院など、具体的な例をあげながら12世紀が目される知的環境が11世紀にどのように発展したかを指摘している。

最後にデイヴィッド・ベイツによる「終章 ウィリアム征服王と彼の時代の遺産」David Bates, 'The Legacy of William the Conqueror and His Age' が本書を締めくくっている。序章と内容的には対をなし、本書の試みを歴史研究の長期的視野の中に位置づける章となっている。ノルマン征服の評価はしばしば評価する側の時代背景が影響してきた。プールの序文でとりあげられたフリーマンの政治的立場はよく知られる。1066年から900年後の1966年は多彩なイベントが行われ特集が組まれた¹²⁾。これは欧州共同体が発足し、それに距離をとっていたイギリスとヨーロッパとの関係が模索された時期であった。950年後の2016年は、まさにイギリスがEUと訣別することになる国民投票が行われた年だった。その際もノルマン征服が記憶の中の比較対象として持ち出されていることをベイツは指摘している¹³⁾。

2. 本書の特徴

次に、本書全体の構成や内容について紹介しよう。

(1) 対象

本書は北西ヨーロッパを対象とすると述べる。したがって、とりあげる空間は、ウィリアム征服王、ノルマン征服研究の中心となってきたイングランドとノルマンディのみならず、これまでのノルマン征服やアングロ・ノルマン世界についての書物よりもさらに北欧世界、フランドル、フランスなど、その周辺地域を対象にしており、とくに地理的側面を含む第1部で意識的にとりあげられている¹⁴⁾。だが、重点はやはりイングランドとノルマンディ、とくにイングランドに関する叙述の割合が大きい。これは、征服されたイングランドのほうが大陸からの人的文化的影響力を受けて大きく変化しているという前提、そしてその研究蓄積の大きさに依るものであろう。

またウィリアム征服王が支配した領域に関し、かつてJ・ル・パトゥーレル J. Le Patourel が提唱した「ノルマン帝国」The Norman Empire という語は使用されず、それについての言及もない¹⁵⁾。またアングロ・ノルマン王国という語もほとんどみられない¹⁶⁾。また、アングロ・ノルマンという語 Anglo-Norman が使用される場合も、意識的に使用しているというよりは、ウィリアム征服王が支配した領域という意味で便宜的に用いられているだけのように思われる¹⁷⁾。

この傾向は、アングロ・ノルマンという呼称を征服王やその後継者たちが支配したイ

ングランドとノルマンディの双方、そしてその文化を便宜的に示すものとして使用するものの、ウィリアム征服王の支配下の領域を「アングロ・ノルマン王国」と呼ぶことで、総体が一つの凝集性をもつ政治的統合体という意味合いを持たせることを避ける傾向と言えようか¹⁸⁾。

また本書の対象となる時間軸はウィリアム征服王の時代である。彼が生きた時代11世紀に関わってその前後もとりあげられている。一方、ノルマン征服の1066年は区切りとされていない。したがって、本書の対象は「ノルマン征服後のイングランド」ではなく、「アングロ・サクソン・イングランド」でもないし、「ノルマン征服前のノルマンディ」、「ノルマン征服後のアングロ・ノルマン王国」でもない。征服の前後、またイングランドとノルマンディで区切って書かれている章もあるが、征服の前後の区切りや地理的区分が明確に現れない章も多い。この点は、征服の前か後かで時代を区切ってきた中世イングランド史の伝統を乗り越える近年の新たな傾向に掉さすものであろう¹⁹⁾。

対象となる人間集団に関しても「イングランド人」「ノルマン人」と明確に掲げはしない。ノルマン人についてはすでに多くの書物でとりあげられてきたが、本書はそれらの対象となってきたノルマン人ネットワークの枠組みを土台としているわけではない²⁰⁾。これは、たとえば征服前のイングランドにはイングランド人のみが存在したのではなく、すでにノルマンディのみならず、フランドルや北歐から様々な人間集団がやってきており交流があった点が認識されるようになり、イングランドはイングランド人、ノルマンディはノルマン人、という単純な観点では説明できないことが前提となっているのであろう。

以上のように、本書の対象はノルマン征服前のイングランド、あるいはアングロ・ノルマン・イングランド、といった区切りを乗り越えることを意識したものとなっている。

(2) 研究視角の特徴

次に、本書にみられる研究視角について、いくつかの点をとりあげておく。

本書におさめられた各章からは、考古学的研究を中心に歴史研究の学際化が指摘できる²¹⁾。デジタル情報も多い。この傾向は今後も進むであろう。一方、異なる手法で生み出された成果の相互交流には相互理解とそのための努力が重要であろう。

また、執筆陣の多様性については前述した。現代ではヨーロッパ統合の進展を背景に、EU内の学術相互交流が盛んになっており、ウィリアム征服王とノルマン征服期に関しても英仏を中心とした大学間の共通プロジェクトを中心に英仏研究者の協力研究が多彩に展開されている²²⁾。本書はその点に関してはとくに言及はなく、また別の言語から翻訳された原稿もないようである。そして英仏を中心に多言語で書かれる論集も増えているなか、Cambridge Companions というシリーズの性質をかんがみ英語に特化することで読者にとっての手にとりやすさに配慮したものであろうか。

さて、本書はノルマン征服の動きについて時系列的な再構成を行ってはいない。また、1066年を区切りにするわけでもない。この点は、21世紀にはいつの定評あるシリーズであるオックスフォードブリテン諸島の歴史のシリーズや『アングロ・ノルマン世界必携』*A Companion to the Anglo-Norman World* や『イングランド社会史』*Social History of England*²³⁾も同様であった。編者プールの序文にあるように、本書は征服王が生きた時代についての見通しであり、ノルマン征服そのものの分析が目的ではない。ノルマン征服そのもの、ウィリアム征服王そのものについては別の文献を参照する必要がある²⁴⁾。また、ヘイスティングズの戦い、ドゥームズデー・ブックといった、ウィリアム征服王、あるいはノルマン征服に関する研究文献なら必ず叙述するであろう定番のテーマもそれとしてはとりあげられず、断片的に登場するのみである。20世紀後半にいたるまでかつてはノルマン征服研究の最重要のテーマといってもよかった封建制とノルマン征服との関係についても本書では言及はほとんどない²⁵⁾。

この点を補足するならノルマン征服研究の研究史については、1999年のM・チブナル M. Chibnall による優れた研究史『ノルマン征服論争』*The Debate on the Norman Conquest*がある。加えて近年G・ガーネット G. Garnett が『イングランド史におけるノルマン征服』*The Norman Conquest in English History*を出版した²⁶⁾。J.-Ph.・ジュネ Jean-Philippe Genet によるイングランドと大陸との関係についての近年の論考も、ノルマン征服を考えるうえで示唆的である²⁷⁾。ノルマン征服研究に関して注目すべきは、ベイツがエピローグで指摘したように、ノルマン征服という歴史的事象の経過やその意義だけでなく、ノルマン征服を我々がどのように研究してきたか、という見通しそのものも研究対象になっていることが改めて感じられる²⁸⁾。

そして、本書は比較文化史的にヨーロッパ全体に共通してとりあげることが可能であるような特徴を盛り込む一方、ノルマンの特徴やイングランドの特徴を際立つ形では描いていない章も多い。つまり当時の西ヨーロッパ世界に共通する特徴を意識する一方、各地域の独自性は強調されていない。この点は、全体としてノルマン人やノルマンディを特別なものとして扱ってきたこれまでの視点が後退し、本書がノルマン人自体が西ヨーロッパ世界の文化やその状況に積極的に同化しようとしていた、という動きを強調していることと関わるだろう。たとえば第1章では、ノルマン公家がキリスト教を推進し、また騎士文化を取り入れるなど、文化的共通性を高めて当時のフランス世界において同等と認められようと努力していたと考える²⁹⁾。また、彼らのノルマン意識の表明も、自らの優秀性、特異性の意識というより、領邦君主たちの中で埋もれないための自己主張とされる³⁰⁾。また、ノルマン征服は軍事面で成功したにせよ、技術的に当時の西ヨーロッパ世界と区別がつかなくなっていたため、ノルマン軍の優秀さに帰することはできない³¹⁾。

そしてノルマン征服以後の社会の様々な要素について、ノルマンの要素か、イングラ

ンドの要素か、という二項対立的な視角より、その相互の影響に注目する傾向も強く見られる³²⁾。また、ノルマン征服がイングランドにどう影響を与えたかという点は、ノルマン征服により大陸の要素がイングランドに流入した、あるいは影響を受けなかった、という理解だけではない。たとえば教会を扱った第5章にみられるように、ノルマン征服後イングランドの教会はノルマンディとはまた別の形で発展した点を指摘することも可能である。すなわち、ノルマンの要素かイングランドの要素か、では分けられない発展の可能性がある。加えて、全体として多様性、重層性が強調される。この点は、たとえば第13章で言語的要素として、イングランドの英語とノルマンディのフランス語の関係だけでなく、ブリテン島内、ノルマンディ内の地域性、北欧の要素、ラテン語との関係など非常に多様で重層的な言語状況にあった点が指摘されていることにも見える³³⁾。

このようにかつての、あるいは今でもしばしば意識せずに前提となっている、特別なノルマンが大陸ヨーロッパとは異なる独自の道を歩んでいたアングロ・サクソン・イングランドを征服した、という枠組みを本書は多様な形で乗り越える試みと言えよう。

(3) 体裁

最後に、本書の体裁について紹介しておきたい。本書に含まれる14の章には明快だが個別事例を示すのではないタイトルがつけられ、内部はやはり具体的だが個別的ではないタイトルのついた節に分けられ、全体の内容を把握しやすい造りとなっている。

また、参考文献リストは巻末にまとめられ、さらに文献に印と章番号をつけることで各章での推奨参考文献を示している。章番号が複数ついている文献も一定程度ある。小さい印だが読者への有効なガイドとなろう。ただし、この参考文献リストに読書ガイド的な説明は付されてはならず、当該書物については各章の註に立ち戻る必要がある。したがって文献案内は本書にはない。一方、文献が各章の註に挙げられた際にはコメントが付されている場合が多く、当該文献の性格を知る手がかりになる。

なお、挙げられている文献の言語は英語以外にも含まれており、必要に応じ重要な関連文献を英語に限らず探すことが可能である。一方、索引は人名地名のみ挙げられる。歴史的概念、用語についても索引をつけてあれば、その概念、用語がどのような文脈で使用されているのか把握することができ、理解の手助けとなったであろう。手引きをめざす本書としてはいささか残念であった。

おわりに

以上、本書の概要とその特徴について筆者の理解を述べてきた。ウィリアム征服王とノルマン征服というすでに圧倒的な研究蓄積と伝統を誇る研究テーマに強く関連しながらも、人物や事件をとりあげるのではなく、それらを生んだ11世紀北西ヨーロッパという世界の理解をめざした本書は、時系列に沿った歴史叙述を期待する向きにはなじまな

いが、とりあげられたテーマは政治文化社会と多岐にわたり、理解の前提となる基礎的かつ具体的な知識だけでなく、最新の研究状況が盛り込まれている。大学テキストの読みやすさと専門性のバランスも意識されたうえで、多様な切り口を示す好著といえよう。

注

- 1) <https://www.cambridge.org/core/publications/collections/cambridge-companions/about> 2023年3月20日.
- 2) <http://www.cambridgeblog.org/2022/06/putting-the-conqueror-in-context-the-new-cambridge-companion-to-the-age-of-william-the-conqueror/> 2023年3月16日.
- 3) E. A. Freeman, *The History of the Norman Conquest of England: Its Causes and its Results*, 6 vols (1867–1879, Oxford). フリーマンとその時代性についてはすでに研究蓄積があるが、例えば G. A. Bremmer and J. Conlin, eds., *Making History: Edward Augustus Freeman and Victorian Cultural Politics* (London, 2015).
- 4) B. Pohl, 'Prologue: Studying the Age of William the Conqueror', in: B. Pohl ed., *The Cambridge Companion to the Age of William the Conqueror* (Cambridge, 2022), p. 1.
- 5) <http://www.cambridgeblog.org/2022/06/putting-the-conqueror-in-context-the-new-cambridge-companion-to-the-age-of-william-the-conqueror/> 2023年3月16日.
- 6) たとえば、D. Bates, *William the Conqueror* (London and New Haven, 2017) は Yale English Monarchs シリーズの1書であるが、当時の時代背景において制服王の生涯を解釈する。
- 7) Pohl, 'Prologue', p. 6.
- 8) たとえば執筆者の所属大学はイングランド8名、スコットランド3名、ウェールズ1名、アメリカ3名、ドイツ1名、デンマーク1名、フィンランド1名などである。フランスに拠点を置く研究者の不在は興味深い。なお、地域の移動や兼任などもあるため上記はもちろん厳密ではない。
- 9) <https://research-information.bris.ac.uk/en/persons/benjamin-pohl> 2023年3月16日。プールの業績は多数あるが、最初の単著は *Dudo of St Quentin's Historia Normannorum: Tradition, Innovation and Memory* (York, 2015) で高く評価されている。たとえば、Elisabeth Van Houts による同書の書評 <https://reviews.history.ac.uk/review/1870> 2023年3月23日.
- 10) Pohl, 'Prologue', pp. 5–6.
- 11) なお、序文の最後でプールは大学における学問が実利性優先へとシフトしている中で本書の出版の意義を強調している。
- 12) 拙稿「ヨーロッパの仲間入り——イングランド史におけるノルマン・コンクエスト理解をめぐって」歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ研究会編『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成 第二回報告書 I 歴史篇』2004年、211–225頁。
- 13) D. Bates, 'Epilogue: The Legacy of William the Conqueror and His Age Today', in: Pohl, *The Age of William the Conqueror*, p. 311.
- 14) たとえば、Ch. Harper-Bill, E. M. C. van Houts eds., *A Companion to the Anglo-Norman World* (Woodbridge, 2002) は北歐世界をとりあげているが、北歐世界が同書全体に渡って関わっているわけではない。
- 15) J. Le Patourel, *The Norman Empire* (Oxford, 1976). ル・パトゥーレルの議論に関し、その後の研究動向については、D. Bates, *The Normans and Empire* (Oxford, 2013).

- 16) Anglo-Norman という語は索引に挙げられていない。王国を指す例として、Anglo-Norman regime, p. 55, Anglo-Norman Kingdom, p. 158, Anglo-Norman realm, p. 245 など数例が見られるのみである。この用語について、拙稿「『ノルマン帝国』後の40年——貴族層と中心としたアングロ・ノルマン史研究の現在の動向」『人間文化』第30号、2015年、294(1)–278(17)頁。また、帝国 Empire の概念についてこの時期を対象に Bates, *The Normans and Empire*, また F. Madelaine, ‘The Idea of ‘Empire’ as Hegemonic Power under Norman and Plantagenet Kings (1066–1204)’, *Anglo-Norman Studies*, 40 (2018), pp. 176–196.
- 17) なお、第13章は言語を扱うため、この時代のノルマンディのフランス語がイングランドに持ち込まれその影響を受けて成立したアングロ・ノルマン語という意味での Anglo-Norman が使用されている。
- 18) この点は、本書の108頁で、「一般的にはアングロ・ノルマン王国として知られる」という保留的文言を付加していることにもみられるだろう (Allen, ‘Church and Society’, p. 108)。
- 19) たとえば、P. Langford ed., *Short Oxford History of the British Isles*, 11 vols (Oxford, 2001–8) (邦訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史』鶴島博和日本語版監修、慶應義塾大学出版会、2009–15年) のシリーズは B. Harvey, ed., *The Twelfth and Thirteenth Centuries 1066–c.1280* として1066年を時代の区切りとしてタイトルに入れるものの、ノルマン征服そのものを中心とした章は配置していない。
- 20) ノルマン人とその活動に注目した文献は多い。古くは C. H. Haskins, *The Normans in European History* (Boston and New York, 1915), D. C. Douglas, *The Norman Achievement 1050–1100* (Berkeley and Los Angeles, 1969) から M. Chibnall, *The Normans* (Oxford, 2000), L. Hicks, *A Short History of The Normans* (London, 2016), J. Green, *The Normans: Power, Conquest and Culture in 11th century Europe* (London and New Haven, 2022), F. Neveux, C. Ruelle, *L’Aventure des Normands* (Paris, 2009), P. Bouet, F. Neveux, *L’épopée des Normands* (Rennes, 2022) など。
- 21) 考古学的研究成果との連携は著しく進展している。この時期に関連する文献として、D. M. Hadley, Ch. Dyer eds., *The Archaeology of the 11th Century Continuities and Transformations* (London and New York, 2017)。本書の4章「風景と定住」はもちろん6章「商業と移動」の章も考古学的研究成果に言及し、デジタル情報も多い。GIS (地理情報システム) を利用した分析など新しい技術についても述べられる (Oksanen, p. 123)。だが技術の具体的な側面は書かれていないため、使用方法は別に学ぶ必要がある。
- 22) 拙稿「『ノルマン帝国』後の40年」。英仏研究者間の関係については、J.-Ph. Genet, ‘Les medievalists français et le Moyen Âge britannique’, in: C. Arrignon, M.-H. Debiès, C. Galderisi, É. Palazzo eds., *Actes du Colloque organisé à la l’occasion du Cinquantenaire du CESCOM Poitiers, 1er-4 septembre 2003* (Turnhout, 2005), pp. 11–28.
- 23) Ch. Harper-Bill, E. M. C. van Houts eds., *A Companion to the Anglo-Norman World* (Woodbridge, 2002), J. Click, E. M. C. van Houts, *A Social History of England 900–1200* (Cambridge, 2011).
- 24) Pohl, ‘Prologue’, p. 3.
- 25) Feudal あるいは feudalism という用語は第1章のノルマンディの成立期の部分でフランス王との関係を分析する際、また第10章の法と裁判の章以外はほとんどみられないようである。
- 26) M. Chibnall, *The Debate on the Norman Conquest* (Manchester, 1999); G. Garnett, *The Norman Conquest in English History: Volume I: A Broken Chain?* (Oxford, 2020)。現在はまだ1巻のみ刊行されている。
- 27) J.-Ph. Genet, ‘Guillaume le Conquérant a-t-il rattaché l’Angleterre au continent ?’, *Annales de*

Normandie, 69 (2019), pp. 199–218.

- 28) 拙稿「ヨーロッパの仲間入り」。
- 29) Plassmann, 'Normandy and the Continent', pp. 16, 22, 24 など。
- 30) Plassmann, 'Normandy and the Continent', p. 16 など。
- 31) Strickland, 'Warfare and Violence', pp. 225–226 など。
- 32) Pohl and van Houts, 'History and Memory', p. 253 など。
- 33) Busby, 'Language and Education', p. 277 など。